

体と結合した靈魂だけが人格であるという、彼の時代には既に一般的となっていた見解に同意を示している。ここでもキルウォードビーは彼の幾つかの教説においても見られるように偉大なる大全の盛期スコラ学における前段階の位置を占めているのである。それゆえ、キリスト教の人間像の哲学的構築を目ざす途上において、前期スコラ学の問題提起と盛期スコラ学におけるその円熟した解決とを連結する役割りを担う彼の著作を公にしたという、まさにこの点も本書の大きな意義のひとつであると言えるだろう。

(酒井一郎訳)

Martin M. Tweedale : *Abailard on Universals*.

North-Holland Publishing Company, 1976, pp. 337

清水哲郎

本書の主題は書名から明らかである。著者トゥイーデイルはアベラールにおける普遍の理論に迫るべく、テキストとその英訳をかなり長く提示し、その論述についてディスカッションを展開する、という仕方で論を進める。それは著者が読者に対して一方的に主張を述べるのではなく、読者（ラテン語に通じていない読者も含む）が著者と共にアベラールのテキストそのものに接するためである。それによって読者はまた、ディスカッションの参加者となるように誘われているのである（現にこの書評の姿勢がその誘いの一つの結果にほかならない）。さらにそのディスカッションは、テキストを観察する途上におけるものというよりは、アベラールのディスカッションに著者自ら参加し、アベラールの問題を著者も問題にするという態度においてなされる。

問われている事柄の故に第一章、第二章はプラトン、アリストテレスおよびポルフィリオス、ポエティウスにおける問題の現われにあてられる。それは確かに概観には違いないけれども、単にこの種の研究書の定石に従ってなされたものに過ぎな

い、と見てはならないだろう。ここにおいても著者はテキストを提示し、ディスカッションを行うという態度を崩さないのである。更に、本書の終章(第六章)はアベラールとフレーゲを比較するものであるが、それもまた、現在において哲学をする著者が、中世において哲学をしたアベラールとの対話を通して見出した事の故にほかならない。

プラトンから現代論理学に亘る問題の地平を背景に、著者は第三章から第五章においてアベラールの普遍理論に対峙している。中心的なテキストは『ロジカ・イングレディエンティブス』(LI)と『ロジカ・ノストロルム・ベティティオニ・ソキオルム』(LNPS)であるが、その解釈に有効である限りにおいてアベラールの他の著作(ことに『ディアレクティカ』は有効に使われる)、さらにはアベラール周辺において成立したと考えられる文書も援用される。

第三章は実在論者の普遍理論に対するアベラールの批判の分析にあてられる。実在論の諸理論のうち、著者が特に重要と考えるものは material essence theory (普遍的なものがいわば材料となって個物が成立するという考え)、及び identity theory (同一のものが普遍でありかつ個物であるとする)である。ここにおける著者の分析的議論はかなりの成功を収めているといえよう。読者は本章においてただちに、アベラールの論理的見地がいかに重要であることを認めることになろう。と同時に、英語で思索する著者がラテン語で論じるアベラールを分析することを通して現われてくる事柄に気付くことにもなるのである。

実在論批判の分析に先立って第三章冒頭において、著者はアベラールが普遍に関して提出した二つの基本的な問い——それは①多くのものに同じ語が適用されることの原因は何か、および②普遍の話は何を、いかに表示 (signify) するか、と解される——を提示し、それらがポルフィリオスの例の三つの問いに比してアベラールの「意味論的接近」を示す、と性格づけている(この二つの問いは本書の構成上重要な論点でもある)。著者が指摘するこの二つの問いが LI の論述において基本的であることは確かである。しかしその問いを著者のように解すること、及び本書におけるこの問いの提示にかかわる引用の仕方には疑義がある。確かにアベラールはポルフィリオスの三つの問いに続けて、著者のいうところの二つの問い(ただし、問いとしての形式はとっていない)を指摘している(そこで著者の引用は終る)。

だがアベラールはそれを受けて次に、ラテン語訳で例の三つの問いの後に“*et circa (ea) constantia*”とあることの解釈として第四の問いを定式化して提示しているのである。ここにおける引用の仕方が公平ではないと思うのは、もしこの第四の問いを考慮に入れたならば、あの二つの問いは果して著者のような解釈となるだろうか、と疑うからである。

さらに、この二つの問いにも関わる引用の仕方の問題が他にもある(p. 162)。その引用の最終部には「普遍的語彙は何ものをも表示しないように思われる」とあり、著者はこれをアベラールの主張であるかのように扱う。しかしながら、この引用にただちに続く部分は「しかしそうではない。というのはそれら(普遍的語彙)は名指す作用(*nominatio*)によって様々のものがある仕方で表示し、……それに際して個物にかかわる理解の働き(*intellectus*)を構成する」であり、かつ、そこから例の二つの問いが改めて提示されるという文脈になっている(LI, p. 19, 7—20)。ここは私の見るところでは、LI 構成上重要な部分であるが、前後のテキストは本書において何らか引用され、分析されているにもかかわらず、全く無視されている。読者にアベラールのテキストを提供するとこの本書の意図が明言されているだけに、なおさらこれは不公平なやり方ではないだろうか。

著者が引用しなかったこれらの所を注意深く読むならば、二つの問いはむしろ次のように理解されるべきであると考え。すなわち、その第一は、普遍的名称が多くのものを名指すという仕方で表示している場面で、何故多くのものに一つの名称が付されるかを問うものである。これに対し第二の問いは、普遍的名称とそれを使う我々の理解の働きとの関わり——理解の働きが何らかの仕方で、ものの共通の似姿を概念把握(*concipere*)している場面——における表示関係の問いである。私の目下の理解の限りでは、この二つの問いの問われる場面の区別について著者は明晰でない。それはまた、とくに第二の問いにかかわる著者の分析全体に或る影を落すことにもなるのである。

第四章は上述の二つの問いに答える部分である。それに先立って著者はまず普遍は *vox* (utterance) ではなく *sermo* (expression) であるという点の分析を行う(ここでは LI よりも LNPS のほうが重視される)。*sermo* は *vox* である。しかしその换位、「(ある) *vox* は *sermo* である」は成立しない。この换位の成立しな

い理由として著者はアベラールにおける「主語によって影響される述語」という考えを提示する。又、*sermo* は *vox* と同じものであるにもかかわらず、*sermo* は *vox* がない場合にも存在し得るというアベラールの主張を、*sermo* が抽象的なものだからだと説明する。すなわち「*sermo* が存在する」とは、或る *vox* を有意味にしている言語的規約が成立しているという事以上の何でもない。——ここまでの著者の分析は優れている。

さて、例の第二の問いは *idea* (*intellectus*) と *image* の関わりという問題となる(第二節)。著者はまず *idea* と *image* とは同じものではないと、アベラールに正当に従って述べる。さらに、*idea* は *image* を必ずしも要しないし、又、*idea* はいかなるものをも(それが関わるものとして)必要としないと言う。ここで私が疑問に思うのは、著者がこの文脈における *forma* を *imago* と同一視している事である。著者は自らの Geyer との唯一の相違は、Geyer が *forma* と *status* とを同一視するのに対し著者はそれを否定し、*forma* を *mental image* と同一とする点にあると述べてもいる。すなわちこの点は本書にとって根本的論点なのである。それにもかかわらず、著者は実に気軽に *forma* 即 *imago* という理解を導入して論を進め、かつ *forma* が名称の表示対象であるとアベラールが認めていると思われるテキストを、許容的いい方であってアベラール本来の主張ではない、などと解している。しかし、LI の文脈では、著者言うところの *idea* (*intellectus*) が *image* を必要としないというのは、ものが現前している場合のことであり、*imago* はものが存在しない場合の理解の働きの向う所として提示されている(この場合の *imago* が *forma* であることは確かだ)。だがものが現前している場合にも *intellectus* はあるのである。ではその場合、その *intellectus* の向う所、つまり *conci-pere* された対象は何か。それは *imago* ではないとはいえ *forma* である可能性は排除できていないのではないだろうか。それは *status* だと答えるならば、その限りではむしろ Geyer 流に *forma* 即 *status* ということになるのではないか。

第四章第3節及び第五章は、アベラールが例の第一の問いに「人」ではなく「人であること (*esse hominem*)」とか *status* (著者はこれを *type* と訳す) と答えたことをめぐる分析である。第四章では *status* がものではないとの主張を明らかにしようとする。第五章においては、そのようなアベラールと実在論者との相違は

「もの」という用語の使い方の違いに過ぎないのではないかとの反論に答えるべく、まず *Dicta* の理論のかなり長い分析を行い、次にそれを *status* としての *esse hominem* に適用するという途を辿る。結果として、*Socrates est homo* は三つの部分から成立つのではなく、主語 *Socrates* と動詞句 *est homo* の二部分から成ること (single part theory と称される) がアベラールの主張として描き出される。この部分の議論は総じて説得的であり、又アベラールの論理学全体への一つの優れた視点を提供したものと評価できるのではないかと思う。

著者の本書における分析は我々を存在論と論理学の哲学の基本的問題へと誘う。私の場合は著者を通して提示された事から例えば次のような感想を得た。すなわち後に形式的な推論を積極的に取り入れ展開した論理学をアリストテレス分析論前書の人工言語といってよいとすれば、アベラールはまさしくカテゴリー論の言語について語っている。形式的には成立つはずの換位が成立たないという、本書においてしばしば登場する場面においては、何かについて何かを述べるということが何であるのかがまさしく問われているのである。この「何か」とは何かということ——それが普遍の問題にほかならないのである。

Alain de Libera : *Le problème de l'être chez Maître*

*Eckhart : logique et métaphysique de l'analogie*

(Cahiers de la revue de théologie et de philosophie 4)

pp. 63, Genève, 1980

大 森 正 樹

エックハルト (以下 E. と略記) の研究については、独・英語圏のものだけでなく、以前より仏語圏のものの中でユニークなものが多々見受けられる。例えば H. Delacroix のドイツ神秘主義に関するもの、P. Théry の研究、Ancelet-Hustache の研究と翻訳、V. Lossky の研究等がその中に数えられよう。ここに紹介する Alain de Libera の研究も僅か63頁という小冊子ながら、内容的にはそれに反し膨